

# 1 主題2時間連続で取り組む「道徳の時間」の指導に関する研究<sup>†</sup>

佐藤 優子・真崎 敦史\*

秋田大学教育文化学部附属中学校

紺野 祐\*\*

秋田大学教育文化学部

渡辺 智一\*\*\*

秋田大学大学院教育学研究科

道徳の時間の指導はこれまで、1主題1時間構成で実践されることが多かった。しかしながら、ひとつの主題を2単位時間かけて取り組む道徳の時間は、児童生徒が思考する時間を確保し、道徳的な価値に対する児童生徒の考えや思いをいっそう深めていくことにとって有効なはずである。そこで本稿は、A中学校において1主題2時間の構成で組み込まれた、平成25年度秋季研修会における道徳の時間の授業実践記録をもとに、1主題2時間で取り組む道徳の時間の指導において配慮すべき点について検討した。

検討の結果、1主題2時間の授業を構想する際に重要なのは、以下の点であることが明らかとなった。第一に、教師の側で重点的に指導すべき主題を授業で扱うという確固とした意図であり、その授業を活かす年間指導計画である。その上で第二に、当の授業の目標実現に寄与する、いわゆる「力のある」資料を選定することである。また第三に、児童生徒の認知上の諸機能や、ひとつの主題に集中して取り組む姿勢等について、クラスの児童生徒の一般的な発達段階および具体的な実態を的確に捉えることである。

**キーワード**：道徳の時間、道徳教育、1主題2時間の授業

## はじめに：問題の所在と本稿の目的

現在のところ、道徳の時間の指導は「多くの場合、1主題1時間構成で計画」（小寺・藤永 2009, 184）され、実践されているといつてよい。通常の教科の指導ではひとつの主題を複数の授業時間にわたって扱う「単元」制がとられることが通例であるのに対して、この点は道徳の時間を指導する際の特徴のひとつになっている。

道徳の時間の指導が一般に「1主題1時間構成」をとっていること理由として、第一に、学校教育法施行規則により道徳の授業の配当時間が年間35時間（小学校1年生では34時間）と定められていることに求められそうである。またこの事情とあわせて、「学習指導要領」に記載されている「内容項目」が、小学校第1・2学年でも16項目、中学校ともなれば24項目と多岐にわたることも重要な条件となる。つまり週に一度しかない道徳の時間では、複数時間連続で指導したくても、特別の授業編成を組まないかぎりには次の授業が一週間後となってしまふ。授業を複数時間連続で計画した場合、児童生徒たちはその一週間で、せっかく作りあげた前時の学習内容について忘れてしまつたり、あるいは関心を薄れさせたりしかねない。また、「学習指導要領」では「すべての内容項目について適切に指導しなければならない」と規定されており、各学年で全内容項目を扱お

2014年2月14日受理

<sup>†</sup>On Teaching the Class Moral Education Constructed with One-Subject-in-Two-Unit-Time

\*Yuko SATO and Atsushi MASAKI Junior High School Attached to Faculty of Education and Human Studies, Akita University

\*\*Yu KONNO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

\*\*\*Tomokazu WATANABE, Graduate School of Education, Akita University

うとすれば、小学校第1・2学年以外では1主題1時間構成で実施しなければならない授業が出てくるのは必然である。

もちろん、多くの道徳の時間で1主題1時間構成をとっているのは、以上のような形式的で消極的な理由からだけではない。たとえば道徳の時間の年間指導計画は、諸教科や特別活動、あるいは学校行事といった学校の教育活動全体の進行・展開にあわせて組まれる。それらの膨大な教育・学習活動と密接に関わらせ、積極的に系統的な指導を実施したいと考えるなら、道徳の時間を1主題1時間構成で運用していくことがもっとも有効そうである。

とはいえ、道徳の時間を1主題1時間で構成することは「原則」とまではいえない。事実、「小学校学習指導要領解説 道徳編」第4章の「道徳の指導計画」（第3節・3）には、年間指導計画を作成する上で創意工夫および留意すべき点のひとつとして、以下のような記述がある。

#### （6）複数時間の関連を図った指導を取り入れる

道徳の時間は、一般的に一つの主題を1単位時間で取り扱うが、内容によっては複数の時間の関連を図った指導の工夫などを計画的に位置づけて行うことも考えられる。例えば、一つの主題を2単位時間にわたって指導し、道徳的価値の自覚を一層深める方法、重点的指導を行う内容を複数の資料による指導と関連させて進める方法、中心的な資料を軸にして複数単位時間を計画して進める方法など、さまざまな方法が考えられる。特に、主題や資料の内容等が深まり、複雑になる高学年の段階からは、主題や資料等の性格に基づき、工夫を図ることが大切である。

「中学校学習指導要領解説 道徳編」には、どういうわけか同様の記述は見当たらない<sup>(1)</sup>。とはいえ生徒の認知発達がいっそう進み、それに伴って主題や資料の内容等がさらに深まる中学校段階では、ひとつの主題を複数の単位時間で扱うべき理由はいっそう明確に出てくるはずである。

実際に筆者のうちの一人には、これまでの中学校における道徳の時間の指導を、まさに引用のような方針をもって2単位時間で行ってきた経験がある<sup>(2)</sup>。その経験によると、2単位時間連続で道徳の時間に取り組んだ場合、1主題1時間構成の授業よりも授

業実践上以下のような部分で効果的であったことが明らかとなっている。

#### ①生徒の主体性を大切に自然な学習過程

2単位時間連続の授業で、生徒の主体性をより大切にしたい指導が展開しやすくなった。たとえば読み物資料を使用する場合には、資料に登場する人物に対して共感や自己投影をさせる手立てをじっくり講じ、その後の発問によって、ねらいに的確に迫っていくことが可能となった。また、いわゆるモラルジレンマ資料を使用する場合にも、各時間で2つの対立する価値について考えることができた。以上のように、2単位時間連続の道徳の時間は、ねらいとする価値に生徒をなつかば強引に引っ張っていく授業ではなく、生徒が主体性をもって、自然に道徳性の「補充、深化、統合」（平成20年「中学校学習指導要領」第3章「道徳」）を図ることに効果があった。

#### ②十分な時間の確保

多くの教師は、道徳の時間の授業展開上、生徒が深く考えることや、その考えたことについての根拠をじっくり話し合うことに時間をかけ、道徳的価値の補充や深化、統合を図っていきたいと感じているはずである。また授業の終末においては、授業終了の時計の針を気にしすぎず、生徒が自分自身をじっくり振り返ることに十分な時間をかけたいと考えているにちがいない。2単位時間連続での授業は、1主題1時間での授業よりも、生徒が「よく考える」時間を確保しやすくなり、より確実にねらいに迫っていく授業を展開していくことに効果的であった。

以上のように、ひとつの主題を2単位時間かけて取り組む道徳の時間は、児童生徒が思考する時間を確保し、道徳的な価値に対する児童生徒の内面的な自覚をいっそう深めていくことに有効なはずである。また1主題2時間での取り組みは、児童生徒どうしの話合いの時間を確保することができ、その意味で他者の多様な考えから自身の既存の道徳的価値の再構築や変容を促すことにとっても有効であると考えられる。つまりひとつの主題について2単位時間連続で取り組む道徳の時間は、道徳の時間の目標にかなう重要な効果が認められそうなのである。

ただし、1主題2時間で行う道徳の時間の指導は、1単位時間で扱ってきたひとつの主題を単純に2単位時間に振り分けるだけで成立するものではなく、そうである。それでは、1主題2時間で行う道徳の時間の指導において、私たちは何に・どのように

配慮すべきなのであろうか。そこで本稿は、A中学校において1主題2時間の構成で取り組まれた、平成25年度秋季研修会（以下「秋季研」）における道徳の時間の授業実践記録をもとに、以上の問題にある程度の回答を与えたい。そのために、授業者およびA中学校道徳部によるねらいと主題の設定、資料の選定、指導計画の構想および立案の過程を振り返り、授業の実際および評価とあわせて検討することとする。また、こうした考察から明らかになる課題についてもあわせて探索する。

## 1. 研究の概要

### (1) 道徳部の研究主題と研究の重点

A中学校道徳部では、平成24・25年度期の学校全体の研究方針「共に学び共に育つ開かれた個～感化し合い互いに高め合う指導の工夫～」を踏まえ、平成24・25年度期の道徳の時間の指導における基本理念をまとめた。それは、道徳の時間において発達段階や生活経験の異なる一人一人の生徒が抱えている価値観の異同に触れる「関わり合い」の場面を意図的・計画的に設定することで、道徳的価値についての自分の感じ方や考え方の変化の確認や自身の成長の実感につなげる、というものである。

とはいえ道徳の時間における関わり合いは、たんに生徒たちが感じたり考えたりしたことを相互に発信・受信しているだけの場面ではない。それを通して生徒一人ひとりが自身の内省まで至り、道徳的価値や人間としての生き方についての自覚を深めることのできるレベルを求めたい。ただここで、内省の段階にまで至る関わり合いとは、相手の意見に興味をもっていることが大前提となる。この「相手の意見に興味をもっている」状態を、一般に「共感 (empathy)」と名づけることができるだろう (Baron-Cohen 2003; de Waal 2009)。つまり、クラスやグループの友達がどうしてそういう考えに至ったのか、またその考えを自分がどう思うのか、どうしてそのように思うのか、たがいがこのように積極的に「共感」するような「関わり合い」の場を用意することで、生徒各人のうちにより深い次元での内省が起これ、「道徳の実践力」(「中学校学習指導要領」第3章)が育成されていくと予測される。そこで同校道徳部の平成25・26年度期の研究主題は、以上のような理由から、「共に考え、共に語り、道徳の実践力を育む指導」、副主題は「生徒同士の『共感』

を深める授業づくり」と設定された。

平成25年春の公開研究会においては、以上の道徳部の研究主題・副主題に則り、生徒たちの意見を可視化するための手立てを重視した。研究授業では、クラスやグループの一人ひとりの考えに触れる機会をつくることで、多様な考えに気づく授業を展開することができた。ただ、生徒どうしのより具体的な意見交換にまでは至らなかったことが事後に反省点として挙げられた。

春の公開研究会で見出されたこうした成果と課題を整理した上で、平成25・26年度期の新しい研究の指針を模索する秋季研では、話し合いの場で「どうして」という問いが生徒の中に浸透し、その結果共感的な関わり合いが可能になるような発問・手立てを講じるという指針が定まった。そしてこの目標のもとでは、積極的な話し合いを必然的に生み出すような資料を選定することが必要である。そこで道徳部では、平成25・26年度期の研究の重点として、①自己理解・他者理解を深める「共感」を促す手立て、②積極的に「受信」「発信」する意欲を高める手立て、③生徒が資料の同質性や異質性に自分自身を深く投影できる読み物資料の精選、の3点を定め、秋季研でその最初の試みを実践することとした。

### (2) 秋季校内研究会における授業の構想

25年度秋季研における研究の重点が以上のようにまとまったが、それでは生徒どうしの共感を促し、生徒が積極的に関わり合うためにはどのように授業を展開すればよいのだろうか。A中学校の生徒は、自分の考えを話すことに積極的な生徒が多い。また、授業の中で個々の考えを深めるために4人グループを作って話し合いをすることを、どの教科・領域の授業でもよく行っているが、その際もグループ内で積極的に意見交流を図る姿が一般的になっている。ただし、その話し合いを共感的な関わり合いの次元にまで至らせるには、十分な話し合いの時間を確保してやるのが前提条件として必要だと考えられた。

とかく道徳の時間の授業では、主発問についてじっくり話し合う時間がとれない状況に結果しがちである。そうした場合、せっかくの話し合いがただの意見の述べ合いとなり、生徒各人の考えの根本にある気持ちや思いに深く触れることなく授業が終わってしまう。そのような授業では、共感を深めることには無理がある。秋季研の研究授業を構想する際、



授業者になることが決まっていたS教諭は、以上の問題に正面から向き合った。その結果、生徒たちがじっくり時間をとって話し合いができるように、1主題2時間で道徳の時間を構成するという解決策の発想に至った。

ただ生徒たちがじっくり話し合いをするためには、資料にもそれだけの力がなければならない。S教諭が資料として選んだのは、平成25年秋に朝日新聞に掲載されていた「いま子どもたちは～二つのバレー部～」というシリーズ記事である。滋賀県内の中学校の部活動に関する全9回の記事は、毎回1人か2人の部員にスポットを当て、それぞれの部員の部活動への思いや取り組みを紹介していた。S教諭は、同じ中学生の記事はクラスの生徒たちの関心を引くにちがいないと考え、この新聞記事のうちいくつかを資料に用いることとした。とすれば、複数の記事の内容について生徒たちが理解を深め意見を練る時間をとらなければならない。したがってこの条件からも、道徳の時間を1主題2時間の構成とする必要が生じた。

なお秋季研の授業での「ねらい」であるが、これはA中学校1年の年間指導計画を踏まえ、また同時に生徒たちの日常生活の中にもう一步学びを深めてほしい現実をとらえ、授業構想前にあらかじめ決定されていた。A中学校の1年生は、4月から新しい集団で生活を始め、多様な学校行事を通じて集団としてのまとまりを感じる経験もしてきた。だが生徒たちの中には、自己中心的な行動が見られることもまだある。また25年10月には1泊2日の宿泊研修を行い、集団のよさに気づくよい機会になったとも推測されたので、11月の秋季研の授業ではその事後指導的な意義ももたせたい。さらに一般に「集団」に同質性を求め、人とちがうことを悪であるかのように思いがちな発達段階にある中学校1年生に、違う立場の人を理解してこそ成立する「集団の意義」について考えを深めさせたい。研究授業の主題名は、授業者であるS教諭の以上のような思いを受け、「集団の意義」（内容項目4－(4)）に定まった。

## 2. 授業の練り上げ

新聞記事「いま子どもたちは～二つのバレー部～」に取り上げられた滋賀県長浜市立西中学校バレー部は、数人の部員が練習をサボって映画を見に行ったことをきっかけに、試合の勝利を目標とする「トッ

プアスリートコース」と、体力アップを目指す「チャレンジコース」に分かれて活動している。どちらのコースを選ぶかは部員の自由であり、途中でコースを変更することも可能である。ただ、コースは分かれているものの練習は一緒にしていることが多いようである。こうした西中バレー部について、読者はまず、2つのコースに分かれた部活動が「集団」としてうまく機能するのだろうか、という疑問をもつだろう。そこでS教諭と道徳部では、2時間連続の授業の1時間目を、シリーズの記事のいくつかを読み進めながら、まずは生徒がこの部活動の形態について理解し、次にその成否についての問いを練り上げる時間に充てることにした。また2時間目を、この部活動が集団としてうまくいくためにどうすればよいのかを考える時間とした。

道徳部における検討作業の中でとくに話し合われたことは、2時間の授業で取り上げるべき記事、2時間目の主発問、および共感的な関わり合いを生む手立てについてであった。

2つに分かれた西中バレー部について理解し、その部活動の成否について生徒たちの考えを揺さぶるためには、シリーズ記事のどれが適切かが検討された。その結果、バレー部が二つのコースに分かれた経緯が詳しく記述されており、その上でチャレンジコースで少し悔いを残して引退した〈栢下君〉という部員について書かれた初回の記事と、チャレンジコースの練習態度に対していらだちを感じながらも理解を示そうとするトップアスリートコースの部員〈細井君〉についての記事、さらに今はチャレンジコースで基礎的な力をつけて、いつかはトップアスリートコースで試合に出たいと考えている1年生部員〈池野君・足立君〉の3つの記事を選定した。また2時間目の主発問については、「このバレー部がうまくいくためにはどんな目標があればよいか」を問い、その目標を達成するために必要なことを考えるという活動を設定した。さらに、授業で共感的な関わり合いを生み出す学習方略として、「西中バレー部はうまくいか・いかないか」について考える活動においては、自分の考えをネームプレートを使ってクラスのホワイトボードのマトリクス上に示すようにした。

道徳部では、以上の資料、主発問、展開および方略といった主要な要素を決定したのち、1年生のうち研究授業があたっていないクラスにおいて事前授

業を行い、その成果と課題についての検討を重ねた。事前授業を行ったクラスでは、シリーズ初回の記事を読んで部活動が二つに分かれたことを理解した時点で、生徒たちに「西中バレー部はうまくいくか・いかないか」と問いかけて自分の考えを示してその理由を発表させた。その後、〈栢下君〉と〈細井君〉の記事を読んで、同様に成否についての考えを示させた。さらに、〈池野君・足立君〉の記事を読み、再度バレー部の成否について考え、そう考えた理由を話し合った。その際、あるクラスではマトリクス上の座標を「うまくいく」「どちらかというとうまくいく」「どちらかというとうまくいかない」「うまくいかない」の4件法とした。その結果、複数の部員の記事を読み進めるごとに成否についての生徒たちの考えは揺れ、西中バレー部の各部員がさまざまな思いで部活動に取り組んでいることを印象づけることができたようであった。また生徒たちの振り返りシートからは、生徒たちが西中バレー部の成否を考える中で、それぞれの部員が部活動という集団の中で置かれた状況を考えることができたことも確認された。そして以上の学習活動が、「多様な部員たちが同じひとつの部活動で活動するために必要なことは何か」という、本授業2時間目のねらいに迫る問いを深く考えることにつながっていった。

授業2時間目の主発問は、事前授業を実施する過程で絞り込まれていった。その中で最終的に、主発問の際に「明日試合があるトッパスリートコースの部員に、チャレンジコースの部員が声をかける場面」「まじめに練習しないチャレンジコースの部員にトッパスリートコースの部員が声をかける場面」を設定し、それぞれの場面でどのような声をかけるかを問うた。生徒たちはこれを受けて、自分の考えを付箋に書き、それをグループで検討し、最後に役割演技をしてそのときにどんな気持ちでその台詞を言ったのか発表するという活動を行った。

道德部が主催した事前授業の協議の場では、以上の授業に関する課題もいくつか明らかになった。秋季研の授業の1時間目ではその意見をもとに、生徒が取り組む主な学習活動を、それぞれの部員の記事を読み、部活動に対してどんな思いや願いをもっているか考え、それをグループで話し合うことを中心とすることにした。S教諭および道德部としてはこの学習活動によって、どんな集団でも、多様な考えや願いをもった人が帰属しているという現実気づ

くことができると予測したからである。この気づきから、多様なメンバーによって構成された集団がうまく機能するには当の集団がどうであればよいか、という2時間目の問いにつなげることを意図した。

また2時間目の主発問についても、「ひとつの西中バレー部」として部活動をするために、トッパスリートコースおよびチャレンジコースをそれぞれ引退する3年生が後輩に対してどんな言葉をかけるかを考えるという、より自然な設定での学習活動に変更することにした。S教諭および道德部としては、それぞれのコースで活動してきた先輩になりきって「ひとつの西中バレー部」であるために大切なことは何かを考えることで、多様なメンバーが帰属する集団が高まるために必要なことに気づくという学びを期待したわけである。

こうして、2時間連続で「集団の意義」についてじっくり話し合い、考えを深めていくための授業が練り上げられていった。

### 3. 研究授業の実践とその考察

#### (1) 1時間目の授業実践

研究授業の対象クラスは、授業者のS教諭が担任する1年B組(37名)である。1時間目に読む資料(新聞記事)の分量が多いので、S教諭は生徒に対して、授業で最初に示す記事をあらかじめ朝読書の時間に読んでおくように指示した。

授業では、導入過程の最初に、生徒たちがどんな集団の中で生活しているかについて問いかけた。生徒たちからは身近な「学年」「学級」「部活動」などの答えが挙がった。その後授業者は、今回の授業では「集団」について考えることを話し、これを板書して意識づけた。

次の展開過程は、西中バレー部のそれぞれのコースの特徴やコース間の移動制度、ふだんの練習形態等について、生徒とのやりとりをもとに整理し、板書することから始まった。以上の諸条件を確認したのち、授業者は、このような活動形態を取る部活動が「うまくいくか・いかないか」について問いかけた。授業者はホワイトボードにマトリクスを記し、生徒たちがそこにネームプレートを貼って、自分の考えを明らかにする方略をとった。

以上の活動の結果、この時点では「(どちらかというとうまくいく)」と答えた生徒が多かった。その理由として、「目標を同じくする人たちが一緒に

練習したほうが効率がよい」「目標が違う人が一緒にいるのはよくないから2つに分かれているほうがよい」といった意見が挙げられた。一方で、「(どちらかというとうまくいかない」と答えた生徒は、「コースに分かれたことでコース間に上下関係が生まれる」「2つのコースに分かれても一緒に練習はしているのでますます目標の違いが練習態度に出てしまう」という理由を挙げていた。

その後授業者は、記事に描かれているそれぞれのコースの部員について考える時間を取った。最初に〈栢下君〉の記事を読み、〈栢下君〉自身が自分の部活動への取り組みをどうとらえているかについて話し合った。同様に、〈池野君・足立君〉という1年生部員を取り上げた記事、さらには〈細井君〉の記事、同じくトップアスリートコースに所属してはいるが背が低く、努力で技を磨いてきた〈吉山君〉の記事と、合計4本の記事を読んだ上で、生徒たちにそれぞれの部員が抱えているであろう部活動に対するさまざまな思いや願いについて、付箋に書き込む作業を行わせた。以上の作業をもとに、付箋に書いたことをグループで発表し合う時間を取った。生徒たちからは、それぞれのコースについての的確な、しかし多様な考えが発表された。

なお発表の際、授業者は意見を発表する生徒とは別に、当の生徒に対してその発表の理由・根拠を質問する係の〈なんでさん〉という役割の生徒を設定した。これは授業者が、クラス中に「共感」を広め、その中で自分の考えを深めていくためには、生徒たちがより積極的に・主体的に「関わり合う」ことを可能とする手立てが必要だと考えた結果である<sup>(3)</sup>。このような〈なんでさん〉が加わった話し合い活動を通して、生徒の中から「2つのコースに分かれてはいるけれど、『バレーを楽しみたい』という思いはどちらのコースにも共通しているのではないか」という考えが生まれてきた。

そして終末過程において、展開過程の話し合いを踏まえて考え、西中バレー部が「うまくいくか・いかないか」についてもう一度考えた。その結果、最初は2つのコースの効率性に注目していた生徒たちの中にも、「目標の違うグループがひとつの集団としてうまくいくのだろうか」「目標が違うメンバーの集まりを集団といってもよいのだろうか」「バレーを楽しみたいという思いは同じなのだから、たがいに高め合うことはできないのだろうか」という疑問

が生まれた。この疑問はまさに、1主題2時間で実践する授業のねらい「集団の意義」に迫っていくものであった。

## (2) 2時間目の授業実践

1年B組における2時間目の授業が、秋季研本番の授業であった。

2時間目の授業の導入過程では、授業者は前時に話し合っただけの考えを想起させるために、3人の生徒を指名して発表させた。前時に生まれた疑問を振り返りシートに明確に書いていた生徒が選ばれた。授業者は生徒たちの発表から、「目標や考えがバラバラなのに集団といったらよいのか」という疑問をクラス全体に投げかけ、2時間目の話し合い活動が始まった。

展開過程では、前時に読んだ記事の中から〈栢下君〉と〈細井君〉の記事を取り上げた。〈栢下君〉はチャレンジコースを選んだが、楽な方に流されて尻切れトンボのまま引退してしまった部員である。まずは生徒たちが〈栢下君〉の部活動に対する思いをどのように考えたか、前時に書いた付箋を見直して確認した。易きに流れたい欲求と同時に取り組みの甘さを後悔する気持ちを、〈栢下君〉の複雑な思いとしてクラスで共有した。他方、県選抜選手にも選ばれたチームのエース〈細井君〉は、チャレンジコースの練習態度に腹を立てることもあった。しかし〈細井君〉は、実はかつては学校も休みがちな生徒だった。そして昔の自分の振り返り、「本当は、みんなでやれたらよかったのに……」と、チャレンジコースの部員を思いやるようにもなっていた。

授業者はその上で、前時に生徒が気づいた、2つのコースに共通する思いを確認した。西中バレー部では、コースに分かれていても「バレーを楽しむ」という思いは共通しているのではないか、という意見を思い出させた。そして、バラバラの目標や考えをもった部員たちが「バレーを楽しむ」ためにどんなことが必要かについて、〈栢下君〉と〈細井君〉が引退するときに後輩部員たちに語る言葉として考えさせた。本時の主発問がこれである。

授業者は以上の発問に即して、生徒に部活動に対する思いが自分に近い方を選んで付箋に書くように指示した。付箋に自分の考えを書いたのち、4人グループでそれを発表し合う時間を取った。なおその際、前時と同じようにグループ内で〈なんでさん〉



を決め、「なぜそのように考えたのか」という問いから各人の意見の根拠を明確化させたり、深めたりできるようにした。

展開過程の最後に、授業者はひとつのグループを代表としてみんなの前で発表させ、その発表に対して別のグループの〈なんでさん〉を意図的に指名し、質問をさせた。この〈なんでさん〉の的確な質問が、各発表者の思いをうまく引き出し、また発表者があまり意図していなかったところについて考えを深めさせるように作用した。

この非常に活発な話し合い活動を通して生徒たちが考えたことを、終末過程で書かせた振り返りシートから抜粋する。

- ・目標がバラバラだからと言ってチームとしてのまとまりが作れないわけではないと思いました。チームみんなで目指せる夢やめあてをもつことでチームにまとまりができて、共に成長し合える環境が作れると思いました。これはバレーに限らないと思います。
- ・集団とは、目標はバラバラでもいろいろなところに共通点があり、この共通点によってつながっているのだと思いました。
- ・目標が違っていても、チャレンジ組の人もトップ組の人も、バレーを楽しんでいるという共通点でそれぞれの組の人の気持ちを思いやれるようになれば一つの集団になれると思いました。

以上のように、生徒たちは1時間目の授業で抱いた疑問をもとに2時間目の授業の中で時間をかけてじっくり話し合うことで、本授業のねらいである「集団の意義」についてそれぞれの答えを導き出したことがうかがわれた。

### (3) 授業実践の考察

研究授業後の検討会では、①「話し合い活動への手立ては生徒同士が互いに『共感』を深め合うことに有効であったか」、②「主発問は集団の意義について理解を深めるのに有効であったか」の2点について協議された。

①について〈なんでさん〉のことについての意見が多数出され、生徒どうしの「共感」を深めるためにはよい手立てであることが確認された。また②については、生徒の言葉を活かして発問できていたということが評価された。(なお課題も指摘されたが、紙幅の都合上省略する。)

2時間目の授業が生徒の言葉を活かしながら展開されたのは、やはり1時間目の話し合い活動が充実したものであったからであろう。1時間目の話し合いで生まれた生徒の疑問やねらいに関わるキーワードを授業者が押さえ、これらを2時間目にあらためて投げかけることができた結果であるといえる。こうした学習が展開されたことがまさに、1主題2時間で取り組んだ授業の最大の成果であると考えられよう。そして以上の流れの中で、クラスにおける「共感的な「関わり合い」がある程度実現されたと評価することができる。また、2時間連続で話し合うための資料として、生徒たちが自分に置き換えて考えられる身近な、魅力的な新聞記事を選定したことも成果につながる大きな要因であった。

### おわりに：結論的考察と今後の課題

これまで取り組まれてきた道徳の時間の多くは、副読本の読み物資料に現れている道徳的価値を1単位時間ずつ学んでいくスタイルをとっている。教師・学校の側からすると、この授業スタイルはたしかに、「学習指導要領」に示される内容項目(価値)の学習を年間指導計画上偏りなく遂げていくという点では効率的であるともいえる。しかしそれはまた、学習が望まれる価値をより切実感のある・積極的なものとして児童生徒に捉えさせるという点では、かならずしも十分とはいえないかもしれない。つまり道徳の時間において、ひとつの主題を複数の単位時間で深く掘り下げる授業実践も必要であるし、またそれは妥当なことなのである。

林(2009)は、ひとたび追求されながら未完了に終わった課題についての意識が尾を引く傾向である「ツァイガルニク効果(Zeigarnik effect)」を引き合いに出しながら、道徳の時間を1主題2時間で構成する可能性を指摘している(90-91)。ここで林の念頭にあるのはモラルジレンマ教材を扱った授業であるが、実際にはこれに限定されることはない。主題や資料内容によっては、1週間後の授業程度までなら児童生徒に忘却されにくく、また想起されやすい場合がありうる。1単位時間目の授業で主題をうまく印象づけることができれば、児童生徒はその授業内容を頭の片隅に置きながら、2単位時間目の授業までの1週間を過ごすことになるにちがいない。

ということは、1主題2時間の授業を構想する際に何より重要なのは、重点的に指導すべき主題(価

値)を授業で扱うという教師の側での確固とした意図ないしは目標であり、その授業を活かす年間指導計画である。その上で教師が、当の授業の目標実現に寄与する、いわゆる「力のある」資料を選定することも重要となる。もちろん、記憶や想起といった認知上の諸機能や、複数のねらいの関係に関する理解能力、またひとつの主題に集中して取り組む姿勢等について、クラスの児童生徒の一般的な発達段階および具体的な実態を的確に捉えることが必要なのは言うまでもない。

A中学校での今回の授業実践は、主題とする価値(4-(4))が実施クラスのその時点での生徒たちにとって非常に重要なものであるとの認識に立ち、1主題2時間構成で行われた。その際、生徒たちの実態に近いリアルな読み物資料を通じて、生徒たちは身近であるが奥深い「集団の意義」という主題に真剣に取り組むこととなったのである。ただそのためにも、授業ではクラスの仲間たちの多様な意見をもとに話し合い活動をじっくり行うことが必要であった。本授業実践ではこの点でも、2単位時間構成のそれぞれの時間で、生徒たちに共感的な関わり合いを深めるような話し合い活動が満足のいくレベルで行われたと評価できる。1主題2時間構成の本授業実践は、以上の意味で一定程度以上の成功を見ることができたといえる。

なお以上のA中学校における授業実践記録をもとに、1主題2時間構成で行われる授業の主題とねらいに関して補足しておく。授業で扱う主題とねらいについては、「中学校指導要領解説 道徳編」にある以下の記述を踏まえたい。「(4) 指導区分：指導区分とは、1主題に2単位時間以上を充てて指導しようとする場合、それぞれの単位時間の指導が、全体としての主題の指導においてどのような位置にあるかを明らかにし、各単位時間の指導のねらいを示すものである。」(第5章「道徳の時間の指導」第2節・1)つまり1主題2時間構成の授業では、最終的に2単位時間でひとつの主題に取り組むのは当然であるが、同時に各単位時間の授業がねらいをそれぞれに明確にする必要があるということである。

A中学校秋季研の授業では、1単位時間目のねらい(O1)を「西中バレー部の活動の仕方について理解し、それぞれの部員の思いを考えて、集団にはいろいろな考えをもった人がいることを理解する」としていた(後掲の「道徳の時間学習指導案」Vを

参照)。ここでは、もちろん全体の主題である「集団の意義」には直結するが、しかし1単位時間目として2単位時間構成の授業全体のねらいから相対的に独立したねらいが設定されていたことがわかる。西中バレー部およびその2つのコースに対する部員それぞれの多様な思いをあぶり出していくその内容は、内容項目でいえば「個性の尊重／寛容・謙虚」(2-(5))に該当する授業であった。

2単位時間目の授業では、前時でオープンエンド気味に終結した「集団」に対する多様な思いを受け、2単位時間全体でのねらい(O2)に迫っていった。そのねらいO2は、1単位時間目のそれO1と並列の関係にあることはできない。O2はある意味で、O1を成り立たせる根拠・背景となるような価値である必要がある。そこで本授業の2単位時間目の授業は、ひとつの集団に帰属する各部員の多様な思いに関する「個性の尊重／寛容・謙虚」(O1)を押さえた上で、そうした価値をも妥当に成り立たせる背景・根拠として、最終的にどの部員も「ひとつのバレー部」の一員としてあることの意味を探り、O2である「集団の意義」(4-(4))という価値の深化を求めたわけである。

すなわち1主題2時間構成の授業は、たんに1単位時間では終わらない授業を半分に分けて実施することではない。その授業では、2単位時間全体での主題をつねに捉えつつも、それぞれの単位時間で学習すべき価値をねらいとして明確に示した授業を実践し、その上で2つの授業をひとつの主題に向けて有機的に編み上げていくことが求められる(図1)。

以上、1主題2時間で取り組む道徳の時間の可能性について、A中学校での実践例に基づいて検討してきた。1主題2時間の道徳の時間は、諸条件を適切に整備すればその可能性を有意味に拡げるものと考えられる。ただ、こうした有効な学習を、道徳の

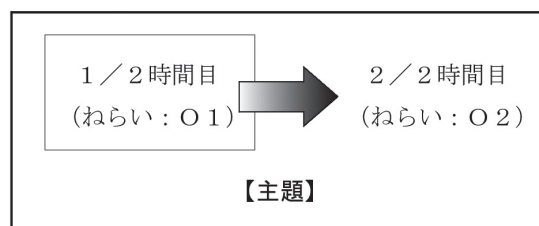


図1 1主題2時間構成の授業における各時間とねらい、主題の関係



時間という授業単体に制限するのはいかにも“もったいない”とも見られる。とすればこれからは、1主題2時間の道徳の時間を核として、各教科や特別活動等、いわば「学校の教育活動全体」での学習が有機的に関連していくような「道徳の時間の年間指導計画」および「道徳教育の全体計画」の策定が望まれよう。この大きな課題には、今後時間をかけて取り組んでいきたい。

〈了〉

### 【謝辞】

本稿執筆にあたり、秋田大学教育文化学部附属中学校の教員の皆様には有益なご意見・多大なご支援をいただきました。深く感謝いたします。

### 【注】

(1)「中学校学習指導要領解説 道徳編」(平成20年)の第5章「道徳の時間の指導」第1節「学習指導案の内容とその作成」1「学習指導案の内容」には、本文「おわりに」に掲げた記述がある。ただこれは、指導案を作成する上で盛り込むべき内容についての説明である。したがってその意図は「創意工夫」や「留意点」としての積極性をもっているわけではない。

(2)筆者のうち一人(真崎敦史)は、たとえば平成21年のB中学校3年生のクラスにおいて、次のような授業実践を行った。この授業実践は、「小学校学習指導要領解説 道徳編」第4章・第3節・3・(6)に即していえば、「重点的指導を行う内容を複数の資料による指導と関連させて進める方法」とったものである。

主題名は、「生命の重さ」(内容項目3-(1))であった。臓器移植に関わって、移植を待つ子をもつ親の立場と脳死状態の子をもつ親の立場が記述された読み物資料をそれぞれひとつずつ使い、「かけがえのない生命を尊び、大切にしようとする心情を育てる」ことをねらいとした。

1時間目に、「移植を待つ子をもつ親の立場から」と題した資料を使い、臓器移植を国内で受けることができるようになったことをプラスに捉えている親の心情を読み取らせた。その終末の時点では、改正臓器移植法案が妥当だとする生徒がほとんどであった。

そして2時間目では、「脳死状態の子をもつ親の立場から」と題した資料を使い、わが子が

死の宣告をされてショックを受けている親の心情を読み取らせた。その後、改正臓器移植法案に対して、賛成、反対、保留のうちどのような立場をとるかを考え、その理由を話し合った。最終的に、どの立場からの意見も共通していることが“命の尊さ”であることに気づくことができた。

(3)授業者は、〈なんでさん〉による話し合いのルールとして、あらかじめ次の二点を伝達した。ひとつは、〈なんでさん〉は発表した生徒に対して2回以上質問すること、である。これは、話し合いが一問一答に終わらず、聞き手に発表者の根拠を伝えたり、発表者が自分の考えの根拠を深めたりできるようにするためである。また二つ目として、〈なんでさん〉と発表者以外の生徒はサポーターとなって、どちらかが発言できなかったときには代わりに話してもよいことである。このルールは、発表者以外の生徒も話し合いに積極的に加わることができるようにするため、および発表者たちが気づかなかったことに気づく可能性を確保するためである。

### 【引用参考文献一覧】

- Baron-Cohen, S. (2003) = バロン=コーエン『共感する女脳、システム化する男脳』NHK出版, 三宅真砂子訳, 2005年
- 林 泰成 (2009)『道徳教育論』新訂, 放送大学教育振興会
- 小寺正一・藤永芳純(編)(2009)『道徳教育を学ぶ人のために』世界思想社
- de Waal, F.(2009) = ドゥ・ヴァール『共感の時代へ: 動物行動学が教えてくれること』紀伊國屋書店, 柴田裕之訳, 2010年

### Summary

The Class Moral Education in many cases has been taught with one subject in every unit time. However we think that students can deepen thoughts and beliefs of a moral value in the Class Moral Education which is constructed with one-subject-in-two-unit-time. Therefore this paper refers to a record that describes a process of an experimental Class Moral Education constructed with one-subject-in-two-unit-time at a Junior High

School, and investigate matters of concern for teaching the Class Moral Education constructed with one-subject-in-two-unit-time.

This investigation reveals that the following points are important for teaching the Class Moral Education constructed with one-subject-in-two-unit-time. 1) To have a firm intention to teach the subject in the Class, and annual education plan which utilize the Class. 2) To choose documents with "power" that contribute to attain the aim

in the Class. 3) To catch general stages of development and actual situations of students in the classroom.

**Key words** : The Class Moral Education, Moral Education, The Class Constructed with One-Subject-in-Two-Unit-Time

(Received February 14, 2014)

道徳の時間学習指導計画

級 1年B組37名  
 学 業 者 佐藤 優 子  
 共同研究者 紺野 祐

I 主題名

「集団の意義」 内容項目 4-(4)

(1) ね ら い 一人一人が自分のよさを発揮できるような集団の在り方について考え、集団の意義について理解を深めようとする態度を育てる。

(2) 資 料 名 「二つのパレ一部」(朝日新聞 記事)

II 主題設定の理由

(1) ねらいに対する指導者の基本的な考え方

中学生は、学校や学級、部活動などの様々な集団の中で生活し、共同で活動を行っている。中学生の時期は、一人一人が互いにかかわり合ったり理解を深め、社会で生きるための人間性を身に付ける大切な時期である。しかし、自分が属する狭い集団のことだけを覚えて、自分とかわり合いの悪い集団や友達に無関心になったり、排他的な考えに陥ってしまったりすることもある。集団の一員としてよりよき生きていくために、集団の意義を十分に理解することは大切であると考える。

(2) 主題に関する生徒の実態

中学校に入學して半年間、生徒たちは、校内体育大会、合唱コンクール、宿泊研修など大きな行事を経験してきた。「学級」という集団の中で、行事を成功させるために作戦を考えたり、グループで協力して当番活動をしたりする姿からは、集団としてよりよきありたいという気持ちは感じることができる。その一方で、自分の都合を優先させてしまったり、周りの友だちの気持ちを考えない言動があったり、まだまだ自己中心的な行動が見受けられる生徒もいる。学級や部活動などの、生徒が属している集団は、目標や立場が違えば一人一人が集まっているが、共同で生活を送っている。集団の力を向上させるためには、生徒一人一人が集団の中の一員としてよりよきことが大切である。その第一歩として、集団の意義を考えることが生徒には必要である。

(3) 資料の特長と取り上げた意図

本資料は、朝日新聞に2013年9月25日から連載されたものである。滋賀県草津市立西中学校の男子パレ一部は、今年の夏の県大会で準優勝し、近畿大会にも出場する強豪校である。そのパレ一部は、今年の1月から二つのコースに分かれている。試合に勝つことを目標とする「トップアスリートコース」と、基本的な運動習慣をつけて体力アップを目指す「チャレンジャーコース」で、どちらを選ぶかは生徒の自由であり、途中で変更することもできる。生徒にとっても部活動は身近なものであり、同じ目標に向かって一歩となつてがんばろうとしている場合も多い。しかし、資料に出てくる部活動は二つのコースに分かれ、その目的もそれぞれである。このような部活動がうまくいくかどうかと思う一方で、こんな部活動があれほしいと思つて生徒もいるかもしれない。記事に出てくる部員がどんな思いで部活動に取り組んでいるか話して合つて考え、二つのコースに分かれた部活動が今後どうなつていくか考えることで、集団の中で一人一人がそれぞれの目的をもち、いろいろな思いをもつて活動していることに気付くことができる。一見目的が違う二つのコースに分かれた部活動だが、取り組み方は違ってもみんながパレ一部を心から楽しむという大きな目標をもった西中パレ一部であることに気付いて、本時のねらいに迫っていくようにしたい。

III 「互いさまをさぐろう」ために

西中学校パレ一部のあり方について十分理解した上で話し合えるように、2時間取扱いで行う。1時間目は、二つのコースに分かれた西中学校パレ一部について、活動の仕方を理解する。さらにチャレンジャーコースの「稲下君」「池野君・足立君」、トップアスリートコースの「細井君」「吉山君」の記事を読んで、それぞれの部員がどんな思いで部活動に取り組んでいるのか、このような部活動の方法がうまくいくのかを話し合う。部員の部活動に対する心情について考え、部活動に対して様々な思いをもつて活動していることについて、理解を深められるようにしたい。

2時間目は、部員の一人「細井君」の記事から、西中学校パレ一部がみんな部活動に取り組むようすればまとまることができるのかを考える。二つのコースに分かれて、県大会準優勝という成績を収めたが、本当は、みんなやられたらよかつたのに、という細井君の心情を考えて、集団の意義について考えを深められるようにする。最初は小グループで話し合い、その後学級全体で話し合う。その際、「なんでさん」という役割を決め、なぜそのように考えたのか問い返すというルールを取った話し合いを通して、一人一人の考えの違いに触れさせて、自分の考えが深められるようにしたい。

友達への考えに必ず問い返し、一見即ちのような意見でも根拠にある思いの違いに触れる話し合いを通して、積極的に友達の話の話を聞いたり、自分の考えと友達の話の考えの異同に気付いたりすることができる。そのことによつて、自分の考えをより深く形成できると考える。

IV 全体的な指導の概観

【1年生の道徳の時間における指導】	各教科・特別活動等との関連
9月 第1週 (1) 資料名 『募金箱』 [4-(4)] □主発問…「みんながこの学級の一員だったらどうするか」 (朝前指導) 『二つのパレ一部』を讀み、パレ一部の状況を把握した上で、それぞれの部員がどんな思いで部活動に取り組んでいるのか話し合つて考える。	4月第2週 保健体育 □『集団行動』
11月 第1週 (2) 資料名 『二つのパレ一部』 [4-(4)] □主発問…「細井君や稲下君は、どんな言葉かけや行動をするべきだろうか。」 (事後指導) 生徒が書いた振り返りを道徳通信で紹介する。集団の中で協力をしている場面を取り上げて賞賛する。	9月第2週 学校行事 □『合唱コンクール』 10月第1週 学校行事 □『宿泊研修』
	12月第1週 総合的な学習の時間 □『職場体験学習』



V 本講の計画 (1/2時間目)

1. ねらい
- 西中パレ一部活動の仕方について理解し、それぞれの部員の思いを考えて、集団にはいろいろな考えをもった人がいることを理解する。

2. 展開

過程	学 習 活 動	予想される生徒の姿
問題 を ・ 解 き ・ 聞 き ・ 上 げ 共 有 化	1 自分が属している集団にはどんなものがあるか考える。 2 「二つのパレ一部」の最初の記事を読んで、西中パレ一部活動の仕方について理解し、二つの記事に分かれた部活動がうまくいくか話し合う。	○ 自分が属している集団を思い浮かべて発言している。 「学校」「クラス」「部活」「職」 ○ 「それぞれ目標の違うグループに分かれて話動しているのだから、目的がはっきりしていきうまくいくと思う。」 「目標が違う部員たちが同じ練習をしていけば、不調やコースによる壁ができて、うまくいかないと思う。」
高 課 め 題 合 解 法 の 決 め	3 それぞれの部員の記事を読んで、西中パレ一部部員たちがどんな思いで部活動に取り組んでいるのか考える。 (1) 栢下君の記事 (2) 細井君の記事 (3) 池野君・足立君の記事 (4) 吉山君の記事	○ 「栢下君は、チャレンジコースに入って、部活で完全燃焼できなくて後悔している。」 「細井君は、だから燃焼しているチャレンジコースの部員にイライラしている。もつとちゃんと練習して欲しいと思う。」 「池野君や足立君は、自分に合った練習ができて満足している。トップ組に憧れている。」 「吉山君は、部活を通して成長できた。」
問 い 直 し	4 グループで意見を交流する。	○ グループで話し合っ、同じ部員についても人によっていろいろな考えがあることに気付いている。
採 り 返 る	5 西中パレ一部の部員たちの思いについて考えた上で、この部活がうまくいくかいかないかも一度考える。 6 学習活動を自己評価し、参考となった友達の意見や授業で感じたこと、考えたことなどをまとめる。	○ 「部員の考えがみんなバラバラの状態、部活はまとまっていけるのだろうか。」 「トップ組は目標が一層からうまくいくと思う。でも、チャレンジ組はサボる人がいてうまくいかない。」 ○ 「友だちの話を聞いて、自分の考えが変わったところがある。」

3. 評価

- 集団の中にはいろいろな考えをもった人がいることに気付いている。

「問い」を立てた表	「話し合う学びの姿」	「評価」
指 導 の 手 立 て	目指す生徒の姿	
○ どんな集団で生活しているかを問いかけ、自分がいろいろな集団の中で生活していることを意識付ける。 ○ 自分の考えを示して話し合いができるように、ホワイトボードに「うまくいく」「どちらかというとうまくいかない」「うまくいかない」と書き出し、自分の考えのところにネームプレートを貼るよう指示する。 ○ 考えの理由にふられるように、なぜそう考えたか理由を発表させる。	○ どのような形態の部活動がうまくいくか、うまくいかないのか、自分の考えをもつとともに、自分以外の人がどんな考えをもっているのか関心をもつ。  ○ あとで分類しやすいように、一人一人に2色の付箋を渡し、トップアスリートコースの部員の思いは黄色の付箋、チャレンジコースの部員の思いはピンクの付箋に記入するように指示する。  ○ グループごとに、自分が書いた付箋を紹介しながら、似ている考えや違う考えを分類しながらホワイトボードに貼り、気付いたことをメモするように指示する。	それぞれがどんな気持ちで部活動に取り組んでいるのか、他の友達とどんなことを考えたのか、友達と考えを交流させて自分の考えを深めている。  西中パレ一部の部員たちの思いを考えた一つの集団の中にいろいろな考えをもった人がいることに気付いている。
○ 考えが変わった生徒になぜ変わったのか理由を問けるように、授業の最初に示したホワイトボードを使い、考えが変わった生徒にネームプレートの場所を変えるように指示する。 ○ 友達とどんな意見に触れたときに自分の考えが変わったか、道徳ノート振り返るよう指示する。		

